



古今和詩集抄

三二

伊地知文庫
文庫20
310
3



古今和歌集

八卷五部



古今和歌集西度聞書卷第三



秋并上

八十首

藤原敏行朝臣

秋五日
よめふ

秋さぬと目井ふやふかき風の喜にそ致さぬ
ふやうの清れ字かち眼目まてい夜の天れ若
きと引くてよ深くこりえなる根かり内れ

氣氣とねもあへ

貫之

秋五日
よめふ
あまの何系
川せうえりし
あまのよも小ま
うりてふあふ

河風の涼くもるる打よ半る浪をたわ秋の立ん

わさ海へくも是は晴の并れ神かり熱して

費之り并いぬひかへくこ也 讀人 不知

我せこの夜けしそと吹みうう涼くは秋の初風

し
し
し

うねりしきせ分ふとぬて珠さくら
序弁ドかれととあし又心あつや

眼目こそさかみあふ月のまふ稲葉いなばとて秋風
時れうららとをながし海門うみかどよりくる物とあふ
このあはひかり又流氣りゅうき氣き弁へんし

秋風の吹あし目もあふこのまは河原かはらおたぬ目送
つれしわこころもささぬ心こころかきまきとも
秋風の吹あし目もあふここの世弁よへんハセクタイ
我がかりてよめるをさつりかろしおたりなら
結んこ

今もあふ河原に海もあつりまはたなくくるとよ

つれの切かたん事とわらひのあつてよめる

まは河原紅葉と橋はしのせをセクたあめ秋とわら
秋こそわらかみちかたれハ紅葉とてよめる
せよわとつりぬ葉はとてよめるわらよあつ
あつて

あひくてもあふ秋とて青あおを河原かはら立つりぬとてわら
恋くてもあわげともあつまんともつり

二のふみおりのあつや あつても乃耳

天あま河がはあさせ白浪しらかげならは海うみりもてぬめを
海うみりもてぬめをよふとてはわらもて
海うみる母はははわらもてわらもてはわらもて

寛平御時七日の
夜ふみさやあめ
を乃こも秋を
まつれとわらも
りは時人かた
て流る

甘藤系雲風

おのしめ時きさい
の宮の宗命の
のけり

種らんをさせとさくぬし
秋ん心そほく記七夕九年十二ふひあふはあふた
一秋のわらぬかきしこわと整りくんをほ

あきとけりよし

凡河内躬恒

まぬらり目れ
東より

年毎よわさといとれ七夕あゆむ秋の敷そすくま
ふの羨かきしそとたしひんて打敷らるる
七夕ふしほる葉の打りて年のとがらく悪やり
是もきとく年のとがらくこころちかけく

うゝかたり

リセイ

かきし

と青らん今あがり七夕あふくき種種よ
人のちりとりしてよよあわると想して

七日夜の
暁小清ら

れわきしとれ

源山子ユキの秋屋

と心くつるこ胸を河つこくわあふ神そひらゆる

切からんがり

王生忠峯

あきこの目
清ら

くふらむいとらん年此昨日とそほくとれと結海ら
きとわあ秋と結くこの切からぬ後讀人不知

木の君もむらりる月の秋これ心ほくこれ秋はる外

本だりの月れあやふもがさゆいふ心とほく

まをてふほくしの秋は来しそりとしり

月ののけしむ秋のなひひともかひのこころ

秋かこれ秋らるるこは秋かこもかき物とらる

けあひ物なみ人の秋りかりてよあひとらる

所へけしてよめるやもやうに弁とらんわ
らん可成とてくふしとて結ぶらんや
やうに脈を結ぶこといふとて

後たけより秋ももわつたふ虫は着るけいんをか
後たけめとて秋とてうれとてくつる秋よわ
秋とて云ふ

物毎に秋を呼ぶに秋を呼ぶ後ういひと脈を
大いふ身はうんとて足つた物といはれんと脈を
うわつるうとて脈を呼ぶとて脈を呼ぶとて
うつらひをうとて物の脈もあつた
見ると脈の脈とてわりの脈とて

ふとて弁と初秋う入候事激とてうんや
かりにわりのこと

独りて脈を呼ぶとて脈を呼ぶとて脈を呼ぶ
ふとてうん長とて脈を呼ぶとて脈を呼ぶ
脈を呼ぶとて脈を呼ぶ

ふとて脈を呼ぶとて脈を呼ぶとて脈を呼ぶ
ふとて脈を呼ぶとて脈を呼ぶとて脈を呼ぶ
ふとて脈を呼ぶとて脈を呼ぶとて脈を呼ぶ

見は脈

ふとて脈を呼ぶとて脈を呼ぶとて脈を呼ぶ
ふとて脈を呼ぶとて脈を呼ぶとて脈を呼ぶ
ふとて脈を呼ぶとて脈を呼ぶとて脈を呼ぶ

こまけと乃みこ
の家の子金
歌

かんちり姑
か小令のつ
すりて秋の夜
わむ奇
あははく小
らり

いふに

初より更かりてこれきりひかやもえんたると
 行いくもふしし月をさにかがしととからふ
 すとそよれ情いかふり多くくまし 讀人不知
 白雲小飛こ打ううう鷹たかれ教おふんゆら秋あきの秋あきれ月
 抄しやう程ほどし書かとはなをかれんんととく鳴なうう
よれ情いかふりかし
 さ秋中あきなかつと秋あきは更かれし鷹たか金かねゆゆららに月つきりりらら
 世よの古ふる神かみああししききもも幽ゆ玄げんののすすくくささ秋
 甲かととももやや更かれんと打うぬぬるる抄しやう
 鷹たかううちちがが死して月つきややくくああははささよよりり極ごくの
 へへ抄しやうととももななりりままし

これきり乃
みまのさかめ
さう合あはは清きよる

月つきをを
よめよめな

人のひとををいいふ
すすれれたたああららの
夜よききりりくくの
啼なげげぬぬとと聞きくく清きよる

月つきれれふふにに物ものもも始はれれ秋あき力ちからいいのの秋あきよよりりはは
 月つき流ながのの氣きかかるるふふいいどどりり月つきとと遊あそそびびははああ
 一ひとももううふふ四よのの秋あき力ちからいいののららららとと事ことと
 いいんんととくく秋あき力ちからいいのの秋あきよよりりははああららとと事ことと
 冬ふゆのの月つきれれ桂けいもも秋あきいいとと紅べに葉はすすれれるるやや照てりりららとと
 月つきのの桂けいのの紅べに葉はすするるふふああららとと月つきれれええのの秋あきののよよりり
 ことことななれれししくくいいひひかかせせるるここ紅べに葉はととくくいいふふののまま
 くののひひかり

秋あきのの月つきれれひひりりわわるるれれらら海うみのの山やまととくくぬぬててらら
 けけいいののひひかり

古今抄卷三

五

友原タ、フサ

在原元方

是貞のみまの
家の奇合也
旁

とまふ人のこころはゆりてこちり然れりわ
神と秋とがよにむくきさうし又人よわい
初る秋とさうしとさうしてり末のからんか
いひとがう人さし事とさうし

敏行朝臣

秋の秋れゆるもあつと時出の秋とわがわが
さうさうさうさうさうのさうさうして秋と
よまうさう

讀人不知

秋と秋とさうさうさうさうと秋と秋と
秋と秋とさうさうさうさうさうさうさう
秋と秋とさうさうさうさうさうさうさう
秋と秋とさうさうさうさうさうさうさう

おひともかろくき理かり

君もまにまにわがわがわがわがわがわが
ふんふんおひひひひひひひひひひひひひひ
ひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ
ひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ

秋の道とゆいひね秋のまよるまよるまよる
秋のまよるまよるまよるまよるまよるまよる
えはれねねねねねねねねねねねねねね
秋の道とまよるまよるまよるまよるまよる
人よまよるまよるまよるまよるまよるまよる
ひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ

紅葉をば教て授けし我若に惟もつ虫くらき
ふ秋もくれ紅葉をばあててつと埋れ
て惟と教びくもかたよまのひりれあ
かすとのたれいふれく又も我人とつわま
りておしとらひとく又おしとらひ
人ももちとつらふも

日く日の鳴つる方今日善くとも山の陰も
かへよかたけけつひのく名よけく日七
くれぬとわよ女とあていふ
ひくしのかく山里のたれいふかよまふ
せうあててあも理ゆ日くしひふ

初二秋後

わかをいふ二首後丸の舟

在原元方

是貞のみこの家の奇合の

初今あぬ物初馬のと明かくあ
あまのいふ秋はけりかやふ此とあ
ふあまのいふあまのあまの初りの
秋凡し初馬金をやるが惟面白と
初とつふ字所く初とつふ字所く
ふ

借人不知

成門よまかせまの鳴る今けさく凡し
は妙よま四れ氣氣秋凡清くかり
あてきかかれありてとと秋凡
中しおりのくあもあもあもあも

し

初冬のやうにやうもあめありの事なれ
人れをきこへかねぬもよひの事
あきてみれあうとての事なれはくへ
ねしは路なかり

いそやも鳴る鳥の白鳥の来るともいそ業
いとやもいそやもいそやもいそやもいそ
のまがかり

も鹿かすとして、あゆまひとて鳴る秋
まのやうにま別一内い物
かりとてきこへとてきこへとてきこへ
りともいそやもいそやもいそやもいそ

世れも極るかかたり

本齊或曰
柿本人丸の也ト

秋とていそやも鳴る鳥の白鳥の来るともいそ業
いとやもいそやもいそやもいそやもいそ

言年山時后の言
此言合の言

秋風の勢とかよとていそやも鳴る鳥の白鳥の来るともいそ業
いとやもいそやもいそやもいそやもいそ

かかるといそやも鳴る鳥の白鳥の来るともいそ業
いとやもいそやもいそやもいそやもいそ

いそやも鳴る鳥の白鳥の来るともいそ業
いとやもいそやもいそやもいそやもいそ

この言はる事
きして清

是貞の親王の家の
之并余の之

きくしと打かきぬはるりかすし奇のり
山里の秋をよみてはれし麻の鳴絲は貞と
山をこれ^{わね}はつとゆり糸を秋より成りて
しるくの麻の絲より糸をひらかるは秋を
よみてふりひりこれとくと糸をてしる奇し
りひりきとは一書とらくと糸のひりかき
きくしはかり

清人不知

ね山は紅葉のしり鳴麻の枝や何そ秋のね
糸山のみらかきぬはるり麻も山より
もる物に海山の紅葉えちりしるるときて
麻のものかきし打かきぬはれしとよは

きくし

きんがり何事をも物れきんはるりて秋

秋をねようひききぬはれ山の下とる麻の鳴
しひききぬはるり物ねあさちか物ねふ
ねしと秋をねもねらりて下葉ら海の
赤がききぬはるり物ねあさちか物ねふ
麻の打あさり物ねあさちか物ねふ
ひりねり物ねあさちか物ねふ
かきかきぬはるり物ねあさちか物ねふ
ききぬはるり物ねあさちか物ねふ
ねらぬと物ねあさちか物ねふ
ねらぬと物ねあさちか物ねふ

秋葉とよしるりて鳴麻の月よはるりて

九

見自のみの
家の奇命の
奇

世あつたふをてと初めつくはむらへ
とそと秋と秋よふれさるる心なるけ
き節への秋のさるむかるとに麻のこゑとま
まほし又云ふくはせしてらむら
鳴くしと我々の流るやけさひひも
神かり

若菜のゆき此節

むらうのひま
侍り名人の秋
の秋やうあむく
とよのわらうま
ほおく小法師

秋萩の秋味よりりち秋の尾上の麻にやがらん
はまの秋名あうしつとふいあれ秋とて
にひひあう秋
秋と秋のうら秋よまけら秋とれりあ心はれり
秋がし秋とれしとにまひの秋さきん

さるる

秋萩のうら秋よまけら秋とれりあ心はれり
秋がし秋とれしとにまひの秋さきん
て物ねりふまきう人ねりあまなすうら
きと時あうんさる

或曰此奇を
あうの奇の
奇并也

鳴はる房のがみさあつた物あふるの秋の上れあ
の物ねりふまきう人ねりあまなすうら
時とも鷹のが秋のうらとやまはうら
見そひてたうこのあま見く物と秋の房
のオとさやと心なるうらと秋の奇
秋のあまうらとこれあうらみんあ秋か
ふはねりうらとさあはと惟よまはうら

帝は此の奇なりと云ふる人

折て見れば一々此の秋の枝もさういふと云ふ

さういふと云ふと云ふもがなひと云ふと云ふ

うぬ秋の枝もさういふと云ふと云ふ

秋の枝もさういふと云ふと云ふ

ふんばりもさういふと云ふと云ふ

さういふ人もさういふと云ふと云ふ

秋もさういふと云ふと云ふ

秋の枝もさういふと云ふと云ふ

眼前のさへあり

名に於ておかしきものなりそ

是自人の出子の家
の奇合月夜

おかし

僧正遍照

席のおほり馬よもおかしきものなり

あゝあゝいふもさういふと云ふと云ふ

女は秋の枝もさういふと云ふと云ふ

いふと云ふもさういふと云ふと云ふ

よめらふもさういふと云ふと云ふ

義がさういふと云ふと云ふと云ふ

のさ男もさういふと云ふと云ふと云ふ

のんがら

秋の枝もさういふと云ふと云ふ

様がさういふと云ふと云ふと云ふ

女は秋の枝もさういふと云ふと云ふ

是自人の出子の家
の奇合月夜

おかし

十ニユキノ一

おかし

古今抄

新羅の王

金中湯

あやかくいせんもかたし又わらきかかくれ
ふかりふいあが

左大臣

女良死林の暗風は打かひさひさひらり
よく打かひさひさふもよそそとらふ
ふかり又ふさふさひらり
らんそん人雅よもふさふさ
く打かひさひさふもよそそとらふ

蘇我定方朝臣

秋かそちあまの事かき女良死わたり河原
とれ河原よりたひぬれゆと七月
かかふもさけり秋かそちあまの事かき
とらり

たう秋あわぬ地ゆ女良死かそちあまの事かき
たう秋よりしうあまの事かき
りたあつらひさひさひとて人と眼は秋の事
るかり又ふさふさふさふさ

ツラユキ

はあつら麻を鳴がら女良死のうとむ暗の秋と
とこがへとあまの事かき
よあつらみほひう奇の事かき
んがら物らり

女良死のうとむ暗の秋と
あまの事かき
よあつらみほひう奇の事かき
んがら物らり

女良死のうとむ暗の秋と
あまの事かき
よあつらみほひう奇の事かき
んがら物らり

志

かろまこれ風情かた

忠六

秋のこがらむらもい母は秋秋とむ若うへてはま

我力やもめめかたむらもいこいふ秋の

道りひどりかたむらもいあまうら若れ

まいさうもありとまうらうへてやな

くさめゆいと母は秋とむらうさあさり

又秋ひらりかたむらうは秋のふもこ

そとむらうは

急覽

母は秋しあまこいさかゆらあまうら若れ

あまうら若れとはむらうひらりかた

あまうら若れもあまうらひらりかた

物(まう)あまう母
人のあまうあま
むらうあまう
あまうあまう

定年時あま
あまうあまう
あまうあまう
あまうあまう

あまうあまう
あまうあまう
あまうあまう
あまうあまう

あまうあまう
あまうあまう
あまうあまう
あまうあまう

あまうあまう
あまうあまう
あまうあまう
あまうあまう

あまうあまう
あまうあまう
あまうあまう
あまうあまう

あまうあまう
あまうあまう
あまうあまう
あまうあまう

あまうあまう
あまうあまう
あまうあまう
あまうあまう

あまうあまう
あまうあまう
あまうあまう
あまうあまう

あまうあまう
あまうあまう
あまうあまう
あまうあまう

あまうあまう
あまうあまう
あまうあまう
あまうあまう

あまうあまう
あまうあまう
あまうあまう
あまうあまう

あまうあまう
あまうあまう
あまうあまう
あまうあまう

平貞文

三十一

とちと種てさへん一死落がふ事秋の海りりり
大く種へれすはのり一歩るち秋の木のひ
と一くかへてかへりたれ種てたふり

ことし

アリラ子ヤナ

秋の種れ葉のなと死落がふ事てまのく神とこ

わさ風り打かひささる飛花のまのく

やうされおのひせさほさる葉の

さへたり

ソセイ法

秋のやと家とさうんりくも鳴々々のやまとな

かたわりあさひひさるるりかるとはほそ

宮を平は時
后宮のそり合
のそり

三十二

みさる家とたよりんれん又かくりタケのやま

一海さとはなされもようこたはよんたり

みりかりひの葉とそまかへ秋の葉の葉とそ

上の葉が下へはわりなれんわり一葉のさ

うもは境りやれてさくともうらるものさ

ふまり

百草の葉のひもさ秋の葉にたのひいさる人まどうめそ

ねひいたさねんとはいひさるる葉と葉よあいか

あゝ様たり

ねくさよ夜なるとの葉よあれてのねらうあひあひま

葉がさるさうき様と奇人のかくま

心風情とよよめし又まゆみの白せきし
きりりやせそ

秋の月河をともしうらみおぼえてうらみ森の
秋の月河をともしうらみおぼえてうらみ森の
たとしてこ下れふり来た事とさうりて
かきりりそくくまのどくく

秋の月河をともしうらみおぼえてうらみ森の
秋の月河をともしうらみおぼえてうらみ森の
たとしてこ下れふり来た事とさうりて
かきりりそくくまのどくく
秋の月河をともしうらみおぼえてうらみ森の
秋の月河をともしうらみおぼえてうらみ森の
たとしてこ下れふり来た事とさうりて
かきりりそくくまのどくく

貞観時法
綺原のまじ梅
の本有けり
子しの方小

さゆりから校の
お舞をりあをり
あつと一みさしは
富ももの清も
み清

石山しまりて
多時まの
権とそ

是月の一
奇合

大く秋とほめしととらあつりてあれ
くくくくくくくくくくくくくくくく
のとくくくくくくくくくくくく

秋の吹ゆ日や音出みのれ梅も
吹そりりりりりりりりりりりりりりりり

秋の吹ゆ日や音出みのれ梅も
吹そりりりりりりりりりりりりりりりり

秋の吹ゆ日や音出みのれ梅も
吹そりりりりりりりりりりりりりりりり

秋の吹ゆ日や音出みのれ梅も
吹そりりりりりりりりりりりりりりりり

王生忠岑

いししん

久も一入由らやうなれうくひく 漢人不知

秋の病多しといひのりかきおのれ業そそけがらぬ

しとお毎しその多くよりのてくくく又の

祝美かきりてくく ツラ ヌキ

白露し四敷しやうのふく業病くし又村ぶらり

あか 在京元 音

あかれの病多しといひ業おのれうく紅業そららん

あか ツラ ヌキ

あかれの病多しといひ業おのれうく紅業そららん

あか ツラ ヌキ

あかれの病多しといひ業おのれうく紅業そららん

あしらの病多し
あしらの病多し

秋の病多し
清く

神の社のやせり
まろりも時止
いづかの因の
いづかの因の

世あれといふあか

忠告

あかれの病多しといひ業おのれうく紅業そららん

あかれの病多しといひ業おのれうく紅業そららん

あかれの病多しといひ業おのれうく紅業そららん

あかれの病多しといひ業おのれうく紅業そららん

あかれの病多しといひ業おのれうく紅業そららん

あかれの病多しといひ業おのれうく紅業そららん

あかれの病多しといひ業おのれうく紅業そららん

あかれの病多しといひ業おのれうく紅業そららん

あかれの病多しといひ業おのれうく紅業そららん

たの病多しといひ業おのれうく紅業そららん

紅友 別

是自一
一 齊合
清く

安んずけ時
一 一 の音

大和の屋まよると
多時保山
音のまよると
とまよると

是貞の

秋の

人の

花の

是貞の

定年

切の

花あけ人のあやかしらんかきやく
のあけりあはれとていひしれ秋のわらわき

秋旁の物なまらそふがの秋のお葉よみ

と赤くてもいふこれ深き地けさかき
おとの雨夜のうし

さかしの秋の夕ぐすれ秋の深くも成る
秋のうらもいれひくれんこころこ

植 秋のうらもいれひくれんこころこ
秋のうらもいれひくれんこころこ

今のおまねよあくる菊のわきの目星こそあやかし
いままの秋の夕ぐすれ秋の深くも成る

病をうけてあきらん葉の花にひせり秋の夕ぐすれ
菊とよめてよらひどののうらとあやかし

植 雨の結まきありし葉うらう秋のわらわき
うへへ葉のひ末まきりし秋のわらわき

秋風の吹上りまたる白葉の秋のわらわき
花のあけりあはれとていひしれ秋のわらわき

淡人不知

坂上見則

ナリヒラ

トヒユキ

紅トヒノリ

大江千里

菅原の朝臣

後よりわやうれ時の奇の常の奇よりりて
時の具とていふかこそられの寛平の秋
の葉合りて葉家れ秋
なまてかよらちの葉は方のふゆの年と我
いとまよあつて

素姓法師

トモノリ

葉のまの洋や
人の人待りか
ゆほろ

死はゆ人待り白ぬの神とのこそわやま
白夜佳人かこのふみは北とて白ぬの葉
死神の多りゆふ葉と死とつてとて
冬よりゆふとてとて死と打かふるまじ
て人と結さぬ

お辰の池のか
み葉枯ま
ゆほ

一もやわらひと死と天海の池の底よし唯

新うけりてくんとかたれく
んまの瑞的とよらるるの具は右奇

ツラユキ

世の仲のまあ
るをま
おりみ葉の花
ま

何首のわが一何の舞か
秋の葉白く
理あつて

元河内ミツ子

何葉のをけ
ゆほ

葉てよわらむ初葉のま
わらやわらんか
かり葉とま
なるおまわら
よま

清人不知

是白の

冬より秋の葉とて

ふハ一葉ふハ二振此花の咲ふらと花ふらと
あれも葉とわひする也

仁和寺より葉の花よりくるお奇きてなれ
とれはせしめられぬ 寛平の御治世の
きり仁わちおまじしくなる時れぬ

秋ときて何となく花は散るなり 平賀文
秋とて散るとはなさりの秋とてきてなり

ふハ仙院の御事とていりくつおなり ツラユキ
候とていりくつおなり ツラユキ

ふハ朝書よりわらうこ 漢人不知
ふハ朝書よりわらうこ

ふハ山の柳の紅葉あめりくるる 漢人不知
ふハ山の柳の紅葉あめりくるる

あふは散るるはふらと花ふらと 漢人不知
あふは散るるはふらと花ふらと

荻原国雄

ふハ山花の紅葉あめりくるる 漢人不知
ふハ山花の紅葉あめりくるる

ふハ山花の紅葉あめりくるる 漢人不知
ふハ山花の紅葉あめりくるる

龍門紅葉をれかなるり 漢人不知
龍門紅葉をれかなるり

ふハ山花の紅葉あめりくるる 漢人不知
ふハ山花の紅葉あめりくるる

ふハ山花の紅葉あめりくるる 漢人不知
ふハ山花の紅葉あめりくるる

良基云の由時之奇のふハ時の氣氣貯ん 漢人不知
良基云の由時之奇のふハ時の氣氣貯ん

まはふらと
はふらと
山花の紅葉
候とていりくつ
ふハ朝書より
ふハ山の柳の
あふは散るる

ふハ

又えよの二万とむれ字一わて末二万の海
のくりかゝる今いまの字一とる古今こゝろ一
とむれ字一わて末二万の海

此奇不恒命

立岡 赤羽馬川

ふりみちのわたりわたり一とむれ字一
とむれ字一わて末二万の海
をわたりわたり一とむれ字一
たさしとてかゝて二とむれ一は并なも
右今いまの字一とむれ字一わたり打うも
まはわたりわたり一とむれ字一一首
の首尾しゅびおむせりはふり一の二首ふたの義

匠たけの道は集あつれ根ね源げんし師し授じゆわらすんんん
いいままのの

ああくく分ぶんててもも無むんん紅くわ糸いとと吹ふききをを引ひきき出ですす風かぜ
いいままのの事こと本もとのの義ぎ
の義ぎとと凡たふのの吹ふききとと凡たふのの吹ふきき

あや

秋あき風かぜよよわわららぬぬ我われそそかかかかききとと又またわわららぬぬ我われそそかか
本もとのの事こと本もとのの義ぎ
ああくく分ぶんててもも無むんん紅くわ糸いとと吹ふききをを引ひきき出ですす風かぜ
いいままのの事こと本もとのの義ぎ
の義ぎとと凡たふのの吹ふききとと凡たふのの吹ふきき

美のまゝのへー秋力いどよあつて取たえれ
 とりれそかきーまとそ又まにあつて
 どのとそ風の木葉の程いりまに無り
 秋まぬ葉の霜にぬらぬるまをて同今
 秋のまぬの来字ー此も秋のまぬを
 りくへと上略ーまるといふ秋のまぬの
 ちりぬまぬいけおりぬかーまぬのまぬい
 ずーていふまぬのまぬい
 少くもてまぬのまぬい
 まぬのまぬのまぬい
 但まぬのまぬい

二方のまぬのまぬい

秋のまぬのまぬい
 山はまぬのまぬい
 吹風のまぬのまぬい
 秋のまぬのまぬい

園雄

秋のまぬのまぬい
 りみちのまぬのまぬい
 秋のまぬのまぬい
 まぬのまぬのまぬい
 てたがまぬのまぬい

僧正 遍昭

俺弁りまぬのまぬい

まよふの力なれどもなまなかくさうんをばへん
はなのいなきけりわづらひんするふしわの
とたのむけをたれり申しくかそとらるるや
其世はらひのたそとらむいぬ一かと安す
ふん

ソセー

二條の右東宮の
中皇女御子
時上中皇女御子
田川よみ
れを
そめ

紅葉のちりしてはるる
みまの大海の
西の風の
そくくられ
まそくくられ
まそくくられ
まそくくられ

ナリ
ヒラ

か

ふも
舟は
の
の
の

トシ
ユキ

秋
らる
そん

忠
命

林
ふ
ま
ま

ウラ
ユキ

是
頁

わらぬお葉
あんなこころ
くりあつ時
よさをふ

秋の音

小社こいふふ
侍りあつ時
葉とて流る

神なごの山ゆき
田川と流る
と流る葉の流

れはあつ時

宮の音合
三

とる人もなきてあめり具あ紅葉いふ此綿衣

ととれやふ小我入んすはかたと云んるり

とわり只と又是とわたりよりみらねんと

おひて来りてみまの山つらつらりあれ

文うかりびる人もな死とあはれとあはれ

てまうりやゆえん

道徳五

立田たつた姫ひめの向むかひの秋あきのあまの秋あきの本もとのあまの秋あきのあまの秋あき

秋あきの山やまの紅べに葉はとてなごの山やまの紅べに葉はとてなごの山やまの紅べに葉は

秋あきの山やまの紅べに葉はとてなごの山やまの紅べに葉はとてなごの山やまの紅べに葉は

このまれまれとてなごの山やまの紅べに葉はとてなごの山やまの紅べに葉は

神かみが人の山やまとてなごの山やまの紅べに葉はとてなごの山やまの紅べに葉は

秋あきの山やまの紅べに葉はとてなごの山やまの紅べに葉は

後永シキカセ

白しろ浪なみの秋あきの本もとのあまの秋あきの本もとのあまの秋あきの本もとのあまの秋あき

水みづ上の紅べに葉はのまのあまの秋あきの本もとのあまの秋あきの本もとのあまの秋あき

とてなごの山やまの紅べに葉はとてなごの山やまの紅べに葉はとてなごの山やまの紅べに葉は

又また水みづのまのあまの秋あきの本もとのあまの秋あきの本もとのあまの秋あきの本もとのあまの秋あき

とてなごの山やまの紅べに葉はとてなごの山やまの紅べに葉はとてなごの山やまの紅べに葉は

とてなごの山やまの紅べに葉はとてなごの山やまの紅べに葉はとてなごの山やまの紅べに葉は

とてなごの山やまの紅べに葉はとてなごの山やまの紅べに葉はとてなごの山やまの紅べに葉は

紅べに葉はのまのあまの秋あきの本もとのあまの秋あきの本もとのあまの秋あきの本もとのあまの秋あき

ひらみらなれとい水みづの上うへに具ぐとてなごの山やまの紅べに葉は

とてなごの山やまの紅べに葉はとてなごの山やまの紅べに葉はとてなごの山やまの紅べに葉は

龍りゆう回かい川せんの音ねあつ時

二条家の舟の心より舟より舟りも
の舟より舟りも舟りも舟りも
舟りも舟りも舟りも舟りも

舟りも舟りも舟りも舟りも

舟りも舟りも舟りも舟りも

舟りも舟りも舟りも舟りも

舟りも舟りも舟りも舟りも

舟りも舟りも舟りも舟りも

舟りも舟りも舟りも舟りも

舟りも舟りも舟りも舟りも

舟りも舟りも舟りも舟りも

忠谷

舟りも舟りも舟りも舟りも

舟りも舟りも舟りも舟りも

舟りも舟りも舟りも舟りも

舟りも舟りも舟りも舟りも

舟りも舟りも舟りも舟りも

舟りも舟りも舟りも舟りも

舟りも舟りも舟りも舟りも

舟りも舟りも舟りも舟りも

舟りも舟りも舟りも舟りも

舟りも舟りも舟りも舟りも

舟りも舟りも舟りも舟りも

舟りも舟りも舟りも舟りも

舟りも舟りも舟りも舟りも

忠谷

紅葉もたかく秋色よそぬとわたりてふらんせん
か利これのわらこ善秋の部ぶ

ナキカセ

空ろ年山崩れ在り
なれと修るは
石田川より流るる
流るる之奇かき
よのちのちのち

深山より流るる水は冬こそ秋流とわたりてふらん
流るるのちこそ秋不月は奇と立田川より
ち葉がくは奇なりわらとる後をき後成
の後の深山より流るる水と三宮山より
ふるしよわら後之葉の秋にかきと云と
三宮山より一町多ふるしよ合せ流るり
かんげ月根も深源とてとそ ツテエキ
年毎は紅葉しかく立田川より秋の泊から
みるとはは流るるてもりともなる雲とて

秋のをほらん
石田川より流るる
流るる

又年くくりんと付て見ん

大井のりく流るる

夕暮れ小倉の山より麻の葉のうらも秋いろ
夕月秋とくくは枕詞とくふも麻の葉よそ
り秋とくふも不月とて内よとこの場一と
めかす秋のめあんと秋の具とわたりて見
るまきとて

新恒

大井のりく流るる

道志くはもゆん紅葉と麻の葉とて秋いろ
秋とてふ人の秋葉が

冬奇 四季と六巻より分る六義を和と又
六根と和と

唐人不知

龍田錦よりく秋月雨の雨とたてぬきおして

ふりて落葉のあきよはこれ雨の雨とた
てぬきおしてよりけきる後又云秋を月
の時ぬれ雨とたてぬきおしてより秋の時ぬ
れ雨の事おれと雨の時ぬれ雨の事おれ
かひらふと是の延喜の秋奇に延喜の秋奇
風流めはとそ貴之奇なるはきくすくよ
秋月雨の雨とぬれ雨とくかよくか貴之
く風流又めは文武天皇立田門より秋事と

て人丸と合新して人丸流はる奇より
奇はゆき文或人丸の二首と古今の古れ字よ
わては奇とは今の字よわのふはは奇の
ふと二よりよ事秋門と貴之とのふよあて
二より月人の貴之奇別よ母と定は奇
冬の事以上入事は集り秋にわく落葉
奇も冬の落葉よりは奇よりわくはれ
もし下ふ去夜秋の不定のふと冬は物と
わくはるわして美かる雨と去死記夜葉と
か秋交付のみか不定の候に草末落葉
あて根よりなる美木のすくはは道

その音そく

の大さこゝ美かりおろしとてめとひりわら
 かりおろしとあるもみさうとんのかれん
 山望の冬そあひくは海より多る命もまもれぬとて人の
 山さぎのさひりさひつ時よりわたりされとまは
 苑のひりさのさひり交海ちさとの下より秋の
 華紅紫の波中もあつらんめともしゆり
 若うれ木のしあもくきさるはいたりさるれ
 たもゆもかれんとくたひひてとゆり人
 大空の月れえし清れぬ水と水と冬かりも
 月より映してい清き水れおろしとさうこ
 かりととんくかひありえ水とるしといふも

そいへ

そのらんもとらこ

せされの家子こ言のよ時山よさるるじ
 夕されいさ夕くれぬの事や夕まともは
 万葉の事とま字のんか一舟の義か
 眼情いよせわの舟とてびり遊山の程多きこと
 世松と夕されいさう風情かせいとあや
 とおもはれそとらるん我宿の落とあふあふる白
 すすきとかなんともわい雪のよりそあそく
 落の打かひいさきとらたりゆれぬ人も
 されといふあそくかなとをさかひり
 てととらんそふし

ふる雪が山をなぐり足るの山は流汁せもほら
くつとひ且こまが

けりはお影がうらたおの雪をれ水そと流らりし
雪をれ水りらさけなまこいこも約の水よ
北も雪消てそ流く流る水よかこいここのこ
らるかろいこいこ

たつた雪野の山をなぐりいひももみゆりつり目
ふれがうらたのうらたのうらたのうらたのうらた
とくこの雪ももれくこいこららと流地が
とれこのうらたのうらたの山をなぐりいひも
我前雪うらたなまこいこかこいこいこいこ

その雪
こく流る
志業の心歌
あく流る

雪うらたのうらたのうらたのうらたのうらた
ぬ我前うらたのうらたのうらたのうらた

雪うらたのうらたのうらたのうらたのうらた
白雪のうらたのうらたのうらたのうらた

ふらうと雪かとのうらたのうらたのうらた
ふらうと雪かとのうらたのうらたのうらた
山の花のうらたのうらたのうらたのうらた
下のふらたのうらたのうらたのうらたのうらた
ふらたのうらたのうらたのうらたのうらた
とする事かろいこいこいこいこいこ

三志郎の山は白雪横に雪さびて成まらるる

はら 依傍に雪もなかりあつたかゝの事

多尔無凡

浦近く流るる雪は白浪の末に松出あとも雪をそらる

うねらるる雪の浦と浦近くては雪に

松山采りひよもてあつたは雪に金玉集

冬人丸うとあり

王生忠宗

三志郎の山は白雪うつろふて命一人の暮後とせぬ

山あふりおひひ入来る人とおひひ雪の後

かりたつて雪の山はうらやまよふと

ふかりとかくお雪はふりあつて入り人

と見たり時たひひりりよ葉のこもるも

伝をせぬとまごふ甚深に世れうは程の事と

こりりかろる

白雪の流て横まる山雲はとむ人えやあひ清

横さしらの雪れあふ山さやとたひひ雪の

乳わつたはひひ消らんとはながれ事と

ながくこもるひひからゆめと我らよりおひ

あつたや

元何内所恒

雪つりて人も海にぬれられぬとてあつた

は三百の流がとて事のたふしあつたは

かたお事かたて我れおひひりりはあつた

あつたは独れおひひりり又法相みお

あつたの京おほ
つりあつた時おほ
せりあつたおほ
雪
雪の事おほ
雪の事おほ

雪の事おほ
雪の事おほ

君のゆりあつとよ
そまゝ

かたはんと親くちしてあれとわりの雷かみなりて
人々かたしむたかたしむたとたふれりよ
冬ふゆなりとをしむたのまじりあつたのわたりかまかまなりて
ゆりあつたをしむたのまじりあつたをしむたのまじりあつた
かたはんと親してあれとわりの雷なりて
人々かたしむたかたしむたとたふれりよ
冬なりとをしむたのまじりあつたのわたりかまなりて
ゆりあつたをしむたのまじりあつたをしむたのまじりあつた

君のまじりあつ
まじりあつたを

ゆりあつたを
かたはんと親してあれとわりの雷なりて
人々かたしむたかたしむたとたふれりよ
冬なりとをしむたのまじりあつたのわたりかまなりて
ゆりあつたをしむたのまじりあつたをしむたのまじりあつた

坂上是則

ちわのまじりあつた
りあつたを
君のまじりあつた

ゆりあつたを
かたはんと親してあれとわりの雷なりて
人々かたしむたかたしむたとたふれりよ
冬なりとをしむたのまじりあつたのわたりかまなりて
ゆりあつたをしむたのまじりあつたをしむたのまじりあつた

こゝに

ゆりあつたを
かたはんと親してあれとわりの雷なりて
人々かたしむたかたしむたとたふれりよ
冬なりとをしむたのまじりあつたのわたりかまなりて
ゆりあつたをしむたのまじりあつたをしむたのまじりあつた

清人 不知

此奇或曰柿本人の
の奇也

ゆりあつたを
かたはんと親してあれとわりの雷なりて
人々かたしむたかたしむたとたふれりよ
冬なりとをしむたのまじりあつたのわたりかまなりて
ゆりあつたをしむたのまじりあつたをしむたのまじりあつた

梅のむめ君のまじり
とよめる

君のうらの梅
の花状傍る

かこせとまわうけじ雪のくへ奥がら
る

小世のむせの能居

死のまの雪のまじりわてかこせたもとなは自人の知
るかきもふおをいとうゆへさとなをく
り但もどかりとも自へといはれがさうや
梅のもれうりとうる雪にほひせ雅くことくひさ
雅うとくみまれふりわすことく
くうくを別してくまうひかまうり
丹はこしくすまうてふおへ一是の雪の
らこ松もれも後のことふりりてやま
よひん



元禄丸

子九月十日

